
平凡な青春の 1 ページ

月見 侑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

平凡な青春の1ページ

【Nコード】

N7277A

【作者名】

月見 侑

【あらすじ】

ごく普通の青春の恋のお話です。ただの普通のお話です。ちなみに実話ですので、あまり現実離れた展開はありません！すいません。

第1話：現在から回想へく出会い

初夏

氷がとけたせいで麦茶は薄くなっていた。僕は畳に転がりながら右手に花火大会の日程と赤い花火が大きく描かれているうちわをパタパタさせて、ため息をもらした。

外は鳥たちがもばててるのか寂しく鳴いていた。都心とも田舎ともいえない地域に住んでいた僕は、住宅が密集している地域性からのびのび呼吸が出来ずに苦しい生活を送っていた。

今年、僕は志望していた大学に蹴落とされ浪人生として過ごしていた。それでも、現役生の時のような新しい生活への切望が消沈してしまっただのか、未だに勉強はできていなかった。親が心配するのに、適当に言い訳しかできない自分がまったくもって滑稽でしかなかった。

「花火か……………」

もうそんな季節になっていたんだと改めて実感した。もう暑さや、息苦しさに実感していたはずなのに。

僕は台所に行って麦茶を捨て、氷を溢れんばかりにグラスに詰め込みその上から麦茶をつたらせた。

再び部屋に戻ると、不思議と棚にある卒業アルバムが目にとまった。

「ああ、そっか」

僕は花火を見ると妙な実感があることに納得した。

花火は僕を薄暗い穴のなかにたたき込んだ光だったのだ。その花火の日は最も夏らしく、僕の短い人生で一番記憶に刻まれたのだった。

棚のガラス戸しばらく開けてなかったのか埃がうつすらとつもっていた。

僕はガラス戸を開けると卒業アルバムを取り出し、おもむろに開いた。しかし、アルバムが開く場所はいつも一緒だった。

刷り込まれた学生達の中に一枚の写真があった。

それは、僕がこの短い人生で一番愛した人と僕との最初で最後の写真だった。

氷は溶けて麦茶はまた薄くなっていた。

僕は自然と彼女と出会った日を思い出していた。

第二話：キミとの出会い、甘酸っぱい夏

高校一年生、一学期、夏

僕は部活がある友達と別れ、体育館裏にある駐輪場に向かって走っていた。バイトがあつたので遅刻するわけにはいかなかった。

不自然に植えられた木々達を横切って体育館裏に着いた。体育館のドアは開けられていて、中にはバスケットボール部がレイアップシュートの練習をしていた。

僕は横目で見ながら自分の自転車の鍵を開け、ストッパーを外し、急いでまたがった。立ちこぎで一気にスピードを上げると、風が体を撫でていき気持ちよかった。

あまりに気持ちよすぎて目をつむってしまった僕は自分が今自転車に乗っているということを忘れていた。もちろん、そんなことをしていればぶつかるのは誰でも予想できたことだった。

案の定僕は体育館外の角を曲がるときに、ぶつかってしまった。

僕はダサく自転車から転けて、とりあえず謝った。

「ごめんなさい！すいません！」

僕は自転車をほっついてぶつかった女性徒の鞆を拾って渡した。

まさか、まさかあれがこれから3年間心を縛り続ける人との出会いだったなんて、今にしてみればまるで漫画みたいな出会いだなと思

った。……ただ、漫画のように絶対にうまくいかなかった恋ではあるのだが……

僕はしゃがんで彼女の顔を見た。彼女は顔を上げると僕の顔を見て笑いながら。

「うん、大丈夫だよ。気にしないで」

とだけ言った。僕は一瞬なにを言えばいいのか分からず、とっさに鞆を渡して、

「そうですか、すみませんでした……」

と目をそらしながら尻すばみに言った。

彼女は笑いながら鞆を受け取りながら

「鞆、ありがとう」

と言ったと同時に僕は自転車を起こし、またがり去った。

こんなに心臓がおかしく鼓動するなんて初めてだった。だんだん体全体が熱くなってきた。自転車はフラフラに動いていた。

「別に、美人じゃないし、かわいくもないし、スタイルだって良いわけでもないし、たいしたことはないな」

と独り言を言って気持ちを沈めた、つもりだった。けどたしかに僕はあの時恋をしたのだ。

後に聞くとあの子は運動部に入っていて、クラスは一番奥の八組だ

った。

こうして僕の恋は静かに始まったのだ。少なくともこの一年、僕は甘酸っぱい幸せな恋をすることになるのだった。

第三話：冬から春へ〜矛盾〜

高校一年生―冬から春―

彼女に一目惚れしてから早くも一年が過ぎようとしていた。

この一年で直接的に行動することは僕には出来ず、彼女を見ることは一週間に一回あるかないかだったが、それでも1日1日、一秒刻まれる毎に僕の頭に彼女が刻まれていったのは事実だった。そんなに好きなのになにも行動出来ずに過ぎ去っていく時間は僕にはとって、ある意味幸せでもあったし辛くもあった。

「このまま忘れてくれれば…」

などと常に念頭に置いて冷めた目で彼女を見るようにしても、僕の目に映る彼女はなぜか可愛く、周りの女子より輝いて見えた。僕は恋をすると言目になってしまふのか、お世辞にも美人とも可愛いとも言えない彼女でさえとても魅力的だった。

忘れたいと思ってみても忘れられないのならむしろ嫌な部分を見つけて見限るつもりだった。僕は熱しやすく冷めやすい人間だということを理解していたので、友達から情報を経て悪口や、彼女のよくない性格を知ったりと、事は順調に進んだようだった。

いつからなのだろう…

僕が相手の醜い部分などをひっくるめて好きになることが出来たのは。

なによりも恋愛に向かないと思っていた自分の理想主義的恋愛観念から外れた恋愛は初めてだった。

冷めるつもりで知った彼女のコト、こんなにも僕を縛ると思わな

かった。

友達から情報をもらうのには代価がいるのは当たり前で、友達は僕が彼女のことを好いているのを知った。友達は僕に彼女の名前は藤崎明恵だということを皮切りに、中学の出身とか彼氏がいないとか余計なことに偶然見てしまった下着の色まで教えてくれた。僕はとりあえず殴って、二人で笑った。

日々積もる気持ちと距離感、そね二つに挟まれて僕は幸せだった。誰も傷つかなくていい恋愛、僕の理想の恋愛のはずだった。

はずなのに、積もる気持ちはやがて僕を蝕み、気付けば一番犠牲になっていたのは僕だったことに気付いた。

忘れたいのに忘れられない。嫌いになりたいのに嫌いになれない。伝えたくないのに、伝えたい。

一年生が終わる頃には矛盾の塊となって幸せな恋愛は徐々に苦痛になっていった……

こうして僕の高校一年生は矛盾だけを残して過ぎ去っていった…。

高校二年生―初日―

玄関ホールの上組のメンバーを記した名簿に、僕の名前

「伊藤 圭」

と下の方に彼女の名前

「藤崎明恵」

があった…

第三話：冬から春へ／矛盾／（後書き）

回想が長くなりましたが、次回の話からだいぶ普通の会話とか出てくるので、堅つくるしい／と思われた方もご期待ください。あ、あとご一読いただいたらぜひ感想ください！待ってます。批判とかでも大丈夫です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7277a/>

平凡な青春の1ページ

2011年1月20日02時57分発行